

## 要注意外来生物リスト 爬虫類・両生類

被害に係る一定の知見はあり、引き続き指定の適否について検討する外来生物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	摘要
ミシシippアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	生態系(競合・駆逐、捕食)	繁殖確認事例は少ないが、遺棄や逸出による個体が野外で広く定着しており、在来種への競合等による影響がある可能性がある。大量に飼育されており規制により代替となるカメ類の輸入が増大する可能性や、大量に遺棄される可能性などが考えられ、今後の被害知見の集積とともに、遺棄のリスク評価や飼育に関するマナーの向上が特に必要である。 販売、飼育にあたっては、長生きすることや大きくなることを十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。日本の侵略的外来種ワースト100(IUCN)、世界の侵略的外来種ワースト100(IUCN)。

被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物

和名	学名	文献等で指摘されている影響の内容	摘要
ワニガメ	<i>Macrolemys temmincki</i>	人の生命、身体に係る被害	カミツキガメと同様に危険動物に指定されており、咬みつきによる身体への被害が心配されるものの、国内での被害のおそれは明らかでない。 都市部を中心に遺棄されている可能性がある。 販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になることや危険性等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。
チュウゴクスッポン	<i>Polodiscus sinensis sinensis</i>	生態系(競合・駆逐、遺伝的攪乱)	沖縄等に定着している。在来のスッポンとの交雑や競合のおそれがある。 食用として利用する場合は、遺棄することがないよう、適切な管理を行なうことが重要である。 これ以上の分布拡大を防ぐために、定着している水系等から他水域へと不用意な移植が起こらないようにすべき。
アメリカスッポン属全種	<i>Apalone</i> spp.	生態系(競合・駆逐、捕食)	<i>A. spinifera</i> は、アメリカ東部原産ながら、西海岸などにも定着、国内では、やや多く流通しており、温帯に産するため逸出個体が定着するおそれがある。 被害の実態については不明であるが、定着すれば在来種への影響が懸念される。 販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になることや危険性等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。
クーターガメ(アカハラガメ)属全種	<i>Pseudemys</i> spp.	生態系(競合・駆逐、捕食)	生態がミシシippアカミミガメと同様で、やや多く流通しており、逸出個体がしばしば見つかる。定着してミシシippアカミミガメと同様の生態系影響を引き起こす懸念がある。 販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になること等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。
チズガメ属の3種	<i>Graptemys</i> spp.	生態系(競合・駆逐、捕食)	ニセチズガメ <i>Graptemys pseudogeographica</i> 、ブドマエチズガメ <i>G. ouachitensis</i> (サビーンチズガメ <i>G. o. sabinensis</i> を含む)、ミシシippチズガメ <i>G. kohnii</i> の3種、生態がミシシippアカミミガメとやや類似しており、また流通しており逸出個体が稀に野外で見つかる。定着してミシシippアカミミガメと同様の生態系影響を引き起こす懸念がある。 販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になること等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。
ハナガメ	<i>Ocadia sinensis</i>	生態系(競合・駆逐、捕食、遺伝的攪乱)	逸出個体がしばしば見つかるが、亜熱帯に分布し、南日本では定着のおそれがある。飼育下でクサガメとの交雑と思われる例があり、野外でも在来種との交雑のおそれがある。 販売、飼育にあたっては、長生きすること、大型になること等を十分理解し、飼い主が責任を持って飼育することを確認する必要がある。
ヒョウモントカゲモドキ	<i>Eublepharis macularius</i>	生態系(野生動物への病原体蔓延)	寄生性の原虫クリプトスポリジウム <i>Cryptosporidium</i> sp.に高い割合で感染しており、さまざまな野生爬虫類への媒介、蔓延が懸念される。この原虫は徳之島に生息する希少種オビトカゲモドキに対して致死的であり、致死率はきわめて高いことが知られる。本種を含むペット爬虫類は、在来動物への感染症等を伝播する危険性があることに留意すべきである。
グリーンイグアナ	<i>Iguana iguana</i>	生態系(競合・植生破壊)	大量に取り引きされるが、きわめて大型になり持ち余されやすく、遺棄された個体が頻繁に報告される。 特に定着の可能性のある八重山諸島などでは、流通量を増やさないように安易な販売、飼養は控えることが望ましい。
アフリカツメガエル	<i>Xenopus laevis</i>	生態系(競合・駆逐・捕食)	実験用等として、大量に利用されており、野外で確認されることがあるが、定着や被害の実態に関する知見が不足している。 実験に利用する場合は、遺棄することがないよう、適切な管理を行なうことが重要である。
ヒキガエル属の5種	<i>Bufo</i> spp.	生態系(競合・駆逐、捕食)	ヨーロッパミドリヒキガエル <i>Bufo viridis</i> 、テキサスマドリヒキガエル <i>Bufo debilis</i> 、チンピヒキガエル <i>Bufo terrestris</i> 、ガルフコーストヒキガエル <i>Bufo valliceps</i> 、ロココヒキガエル(キャハンヒキガエル) <i>Bufo paracnemis</i> の5種。日本においてヒキガエル属が外来種となっている例は多い。これらの種はヒキガエル属の中でも輸入が比較的多く、主として温帯に分布する。 飼育にあたっては、逸出のないよう十分に留意し、飼い主が責任を持って飼育する必要がある。